

学力格差問題のまわりで



若者

前馬 優 策*

Around the Issue of Achievement Gap

Key Words : achievement gap, social class, effective school

「学力格差」問題との出会い

日本と韓国で初めてサッカーのワールドカップが開催される。そんな2002年に、私は大阪大学人間科学部に入学した。教職課程の講義を受講していたが、18時から行われる授業と日本代表の試合がかぶり、携帯電話の画面で「速報」をチェックしていたことが懐かしい。

教職課程の授業には、様々な学部の学生がやってくる。教職課程の授業はディスカッションやグループ発表が比較的多かったので、色んな学生と議論をすることができた。ただでさえ時間割が詰まっている1回生の夜の授業はつらくもあったが、期せずして実りある時間を過ごせたと思っている。

人間科学部では2回生の後期から4つの「学系」に分かれて学ぶことになるが、「教育系」を選ぶことにためらいはなかった。しかし、その中でも10ほどの研究室がある。迷った末、知人から「この研究室がいい」と薦められてなんとなくそのまま選んだのが、池田寛教授と志水宏吉助教授（当時）の研究室だった。教育文化学研究室では、「教育」というものを「文化」として捉え、とりわけ社会的に弱い立場におかれた「マイノリティ」が「教育」の中でどのように学校生活を経験しているのか、それがどのような帰結をもたらしているのかという問題が、主要なテーマとされていた。「教育」という事象を

そのような視点から読み解こうとすることは、最初のうちはあまりピンと来なかったというのが正直なところだ。

しかし、当時注目を集め始めていた「学力格差」の問題について勉強する中で、少しずつ自分のやるべきことが見えていったように思う。

あのと時のモヤモヤ

中学校の頃、定期テストの前になると、決まって私の家に遊びに来る同級生がいた。「せっかく部活休みなんやから遊ぼうや！」と屈託なく笑う彼の誘いが、私にはとても不思議だった。「テスト前やのに、なんで勉強せえへんの？」と。そこには、「あいつは勉強嫌いやから」という理由だけでは片付けられないものがあるような気がしていた。彼からすると、私の方が不思議なヤツだっただろう。「せっかく部活が休みなのに、なんで勉強ばかりやねん」と。とにかく、よくわからないモヤモヤが中学3年生の私の胸に浮かんだことは確かである。

その後、しばらくはそのモヤモヤと向き合うことはなかったが、研究室での生活によって、モヤモヤが再び頭をもたげてきた。今となっては当たり前のようにも思えるが、学力には、単純に生まれ持った頭の良し悪しというよりも、家庭の生活環境・親からの期待・親の学歴や職業、等々の環境的要因が大きく関係しており、それらが子どもたちのあいだに「学力格差」を生み出しているという説明は、中学3年生の私のモヤモヤを解決してくれるような気がした。

フィールドでの経験

同世代の研究者たちと話をしていると、「あなたたちの研究室は、現場に入り込んだ研究ができてい」と言われることが多い。私にはそれが当然だっ



* Yusaku MAEBA

1983年5月生
大阪大学大学院 人間科学研究科 博士
後期課程単位取得退学
現在、大阪大学 大学院人間科学研究科
学生支援室 講師 修士(人間科学)
教育社会学
TEL : 06-6879-4043
E-mail : maeba@hus.osaka-u.ac.jp

たので「そんなものなのかなあ」と思ったりするのだが、当事者にとってはそんなものなのだろう。とは言え、教育文化学研究室では、フィールドワークで人や現場と関わり、その中から「知」を生み出すことを大切にしよう教わってきたことは間違いない。

3回生の頃から、私も週1回の「フィールドワーク」と称したボランティアに出かけた。私が入った小学校の6年生は、夏休みを過ぎた頃から、徐々に荒れていった。教室には人間不信が渦巻いていた。暴言、けんか、嘲笑、爆竹。担任と子どもたちがうまくいかず、担任が配布したプリントをそのままゴミ箱に捨てるということもあった。当時の先生の心労をおもんばかると苦しくなる。

いや、きっと子どもたちももがいていたのだと思う。経済的に苦しい家庭や、養育が不十分だと思われる家庭が比較的多い地域ではあったが、そうした生活を丸ごと抱えて彼らは学校に通っていた。そういう子どもが必ず学校生活でうまくいかないとは限らない。しかし、一つボタンを掛け違えると、往々にしてうまくいなくなるような、高いリスクに曝されているのは間違いない。

そんなことを感じていたとき、その小学校の子どもたちの学力テストの成績が市内でも特に低いということを目の当たりにする機会があった。「やっばりそうなのか」と強い衝撃を受けたとともに、この問題を研究したいと強く思い、大学院に進学することにした。

「効果のある学校」の研究と「学力格差発生メカニズム」の研究

大学院に入ってからは、「子どもたちの学力格差を無くすために、学校で何ができるのか」というテーマと、「学力格差が生じるメカニズム」というテーマについて主に研究を進めた。指導教官であった志水先生は「社会経済的な背景に由来する学力格差を克服する学校」＝「効果のある学校」研究の日本における第一人者であった。「効果のある学校」に関する数多くの共同研究に参加する機会にも恵まれた。そんな中で、自分が貢献できたと思うのは、「効果のある学校」の「学年の異質性」、つまり「学年が違くと結果が変わってくる」という（当たり前だけど）きちんと示されなかったことを指摘したこ

と、それでも安定した好結果の学校も存在し、その学校では「効果のある学校」たりうる学校文化やシステムが根付いていることを確認したことだった。

もう一つの研究テーマは「学力格差が生じるメカニズム」についてだった。学力格差の問題を社会的に解決するためには、やはりそのプロセスを明らかにすることは有効である。博士前期課程のときに行った子どもたちの言語調査もその一つだった。小学校入学直後の1年生一人ひとりに、共通の絵を見ながらその絵に関する「物語」を調査者に向かって話してもらい、その言語運用と保護者のアンケートの回答との関連を明らかにしようと試みたのである。そこで得た重要な結果は、同じ絵を見ている（文脈を共有している）にもかかわらず、ホワイトカラーの職に就いている家庭の子どもは明らかに主語の省略が少ないという結果であった。

その後、彼らの4年後の学力状況を調べてみると、省略の少ない言語運用を行っていた子どもの方が高学力になる傾向があった。親の職業によって子どもの言語運用に違いが生まれ、結果的に学力の違いに結びついている可能性が見えてきたわけである。

過去の話のように書いたが、これらの研究は途上だ。一つのことが明らかになると、二つの疑問が生じるというように、ネズミ算的に「問い」が増えることもしばしばである。それがおもしろくて、研究に携わる生活から離れられない私がいる。

学生支援の仕事に携わって

2012年から2年間、他大学で教職課程の教員として仕事を行った後、2014年より人間科学部の学生支援室で講師としての職を得た。学生支援室は私にとってなじみが薄く、「果たして何を支援すればよいのか」と思案しながら仕事に取りかかった。当時は、4月から就職活動の「選考解禁」というスケジュールだったため、着任後ほどなくして内定を取れなかった学生が相談に来るようになった。私自身はいわゆる「就活」を経験していないため、学生へのアドバイスも今となってお粗末なものだったと思う。涙を流す学生にかける言葉も見つからず、ただうなずいた。しかし、とにかく話を聞くことに徹すると、最終的には自分で答えや行き先を見つけていく学生ばかりだった。その後は、就職活動の最終局面だけでなく、キャリア教育関連の授業も含めて、

学生の就職活動にトータルに関わることが続いている。

学外の人と話していると、「大阪大学の学生だったら、余裕で就職できるでしょ」と言われることが多い。私は決まって「それがそうとも限らないんですよ」と答えている。大阪大学の学生は、一般的には学力が高い方に入るが、それとこれとは別問題である。

私はこれまで「学力」というものを追いかけてきたが、今の仕事をするようになって、義務教育や高校教育で培ってきた「学力」は、果たして社会に出た時に通用するものなのだろうか、と考える時間が増えた。テストで測られる「学力」は子どものもつ「力」の一側面であるという記述は、研究の前提と

してよく書かれることでもある。しかし、私が大学に入った頃よりいっそう、その一側面であるはずの「学力」が学校教育の現場で大きな力を持ち始めている。それに危惧を覚えながら、しっかりと地に足をつけた学力格差研究を続けていきたいと考えている。

余談になるが、時々、学生から「大学院に進学したら就職はどうなりますか」と聞かれる。人間科学部の就職支援の担当者という立場からは、「進学した方が就職には有利になる」とは言えないのが現状だ。それを伝えるのはとても悔しいことでもあるが、「苦しいこともあるけど、それでも私は楽しかった」と一緒に伝えるようにしている。

